

ナサン・エドワーズ、ジョン・アップダイクとの比較など、魅力的な論稿が多い。さて本書を読んで痛感するのは、近現代哲学、教義神学、文学、政治思想史などを巻き込んで展開されているアウグスティヌス研究の裾野の広がりや学問的な交流のあり方である。たしかにわが国でも、教文館の『著作集』や創文社から刊行された一連のモノグラフなどを中心に、教父研究誌『パトリスティカ』（新世社）や『中世思想原典集成』シリーズ（平凡社）も加えて、すでに相当の蓄積をみている。しかし中世哲学会を含むアウグスティヌス研究が、他の分野の研究者と交流し刺戟し合う場面はまだ数少ないのではないか。やがては日本語でこの種の論文集が刊行されることを、同学に携わる者の念願としたい。

---

Alexander Knysh

*Islamic Mysticism : A Short History*

E. J. Brill, 2000, pp. 358

仁 子 寿 晴

同書は Brill の新しいシリーズ Themes in Islamic Studies の第一巻である。このシリーズはイスラーム研究における各分野の概説が目的とされており、刊行予定の幾冊かは同社の *Encyclopaedia of Islam* からの抜粋になるようだ。この書は Knysh のオリジナルな著作であるが、使用した *Encyclopaedia of Islam* の項目が巻頭に記してあり、どのような著作であれ、できる限り *Encyclopaedia of Islam* に依拠させることが編集方針のようだ。この書は原典への参照がなく、不満を感じさせるが、著者の責任ではないのであろう。Knysh が原典を読み込んで記述したと思われる重要な指摘も見受けられるが、原典にさかのぼって確認することができないのが残念であり、以降に刊行されるものでは少しでもその編集方針が是正されるべきであろう。しかし近年の *Encyclopaedia of Islam* の項目は研究成果の蓄積などによりかなり充実した内容を持っているので、それがまとめられるということは有益ではある。

イスラーム神秘主義 (taṣawwuf) の分野では数多くの概説書がすでに存在する。代表的なものを拾ってみると、古くは Arberry (*Sufism An Account of the Mystics*

of Islam, London, 1950) ら、定評のある Schimmel (*Mystical Dimensions of Islam*, Chapel Hill, 1975)、最近では Baldick (*Mystical Islam: An Introduction to Sufism*, London, 1989) のものがある。また分量は多くないが Molé (*Les mystiques musulmans*. Paris, 1982) を推奨する学者は多い。Baldick に見られるように13世紀以降現代までの神秘主義教団を多く扱うことが近年の傾向である。Baldick は著作のほぼ半分をその記述に当てており、その割合を Knysh も継承している。Arberry, Schimmel, Molé らが一章しか割いていないのとは対照的である。この傾向は地域研究への傾斜という最近の研究動向 (特にアメリカ, フランス) を正確に反映している。Knysh は超歴史的なイスラーム神秘主義記述に強く反対し (p.326)、現代へとつながる神秘主義教団に限らず、時代・地域によって様々な形態をとるイスラーム神秘主義像を描き出そうとしている。かつて一世を風靡した Guéon や Schuon といった「久遠の哲学」を標榜する学者たちをシャーディリー教団の系統を引くマグレブのアラウィー教団と結びつけている (p.248) ことはその意味で興味深い。

Knysh は旧ソ連で教育を受け、現在ミシガン大学で教鞭を執る。専門はイブン＝アラビー (d. 1240) 研究、およびイエメンの歴史的地域研究。彼の前著 *Ibn 'Arabi in the Later Islamic Tradition: The Making of a Polemical Image in Medieval Islam* (Albany, 1999) は書名が示すようにイブン＝アラビーの思想そのものを扱ったものではない。むしろイブン＝アラビーに対する後代の批判 (代表者はイブン＝タイミーヤやタフタザーニー) が彼にどのようなイメージを盛り込んで、どのような文脈で行われてきたのか、を詳細に調べることによって、イエメンやティムール朝の文化といった中世イスラーム社会のこれまで語られてこなかった側面を明らかにしている。またそのような戦略をとることによってとらえどころのないイブン＝アラビーの思想を逆に浮き彫りにすることにも成功している。難を言えばイブン＝アラビーの著作の注釈者たちの思想が語られていないことであるが、当該書での戦略上仕方のないことであろう。*Islamic Mysticism* でそのあたりのことが補足されていることを期待したが、イブン＝アラビーの後継者たちに関してはほとんど見るべきところはない。むしろこの書では Morris ("How to Study the 'Futuhat'," in *Muhyiddin Ibn 'Arabi: A Commemorative Volume*, ed. by S. Hirtenstein and M. Riernam, Brisbane, 1993, pp. 73-89.) の見解を引きながらイブン＝アラビー『メッカ啓示 (*al-Futūḥāt al-Makkiyya*)』をどのように読み解いていくのかという方法論を簡潔に提示するにとど

まっている (Chapter VII, pp. 163-168).

イスラーム神秘主義の歴史は①初期禁欲主義, ②バグダード派の台頭, ③10-11世紀の体系化および手引き書作成, ④個性的な思想家の出現 (12-13世紀), ⑤神秘主義教団の成立および教科書の出現, ⑥神秘主義教団の発展という六つの段階で捉えておくのが便利である。概説書を見る場合, これらのどの段階を重視しているのかが一つの評価基準となろう。この点から見ると *Islamic Mysticism* は, すでに指摘したようにまず⑤ (Chapter VIII), ⑥ (Chapter IX) が従来の概説書に比べて重視されていることが一点, さらに② (Chapter III) ③ (Chapter VI) も大きく取り上げられていることが第二点, それらを重視することから④の部分が少なくなってしまうことが特徴としてあげられる。第三点の具体例は既出のイブン=アラビーを含め, アフマド・ガザーリー, アイヌ=アルクダート・ハマザーニー, シハーブッディーン・ヤフヤー・スフラワルディーといった人々である。

Knysh 自身が Baldick の著作の書評をしており, *Islamic Mysticism* でも Baldick をかなり意識しているように見えるので, ここからは Baldick との比較を中心に内容を紹介したい。歴史的順序に沿って①から順に取り上げていく。Baldick はイスラーム神秘主義の起源を主に現在のシリアやイラクに存在していたユダヤ教的キリスト教 (Jewish-Christian) に求めている (彼はそれ以外にも中央アジアのシャーマニズムも考察しているがここではそれには注意を払わないことにする)。さらに重要なのはクルアーンを中心とするイスラーム自体が9世紀頃まで緩やかに発展し, イスラーム神秘主義と同じようにユダヤ教的キリスト教の影響下にあったとしていることである。したがって Massignon がかつて行ったようなイスラーム神秘主義がイスラーム起源か, 外来起源かという2分法を廃している (Massignon はこのような区別のないに立って, 前者を選択する)。一方 Knysh は Baldick ほど極端な説をとっていないが, 神秘主義の起源がイスラーム的であると明言していない点を確認しておく必要がある。逆に最近の概説書の中で Baldick と正反対の立場をとるものは Ernst (*The Shambhala Guide to Sufism*, Boston and London, 1977) がある。

②③ Knysh が特に力を入れた部分と思われる, 概説書レベルのものとしてはもっともよくまとまっている。Chabbi の研究 (特に "Remarques sur le développement historique de mouvement ascétiques et mystiques au Khurasan," *Studia Islamica* 46 (1977), pp.5-71.) で浮上してきたホラーサーンの神秘家たちの存在, および彼ら

とバグダード派との関係、さらにその結果としての10-11世紀の手引き書の書かれ方が整合的に叙述されており、説得力がある。要約すると以下ようになる。カッラーム派やマラーマ派といったグループがホラーサーンで、イラクの神秘家たちとは独立して活動していた。その後ジュナイドの系統を継ぐ者達がホラーサーンなど東方イスラーム世界に移住して、在来勢力の全てではないにせよ、その大半がイラクの神秘主義の勢力に取って代わられる。そのような神秘主義の配置を受けて主にホラーサーン出身の人々が神秘主義を体系化し、手引き書を作成していく。この時点でできあがったものが我々が現在念頭に置いているようなイスラーム神秘主義（特にスーフイーという概念）ができあがったというものである。したがってタサウフは単にイラク型だけのものではなく、ホラーサーンの影響を一定の形で残した神秘主義ということになる。一方 Baldick はホラーサーンの神秘主義勢力をそれほど重視しておらず、バグダードとホラーサーンの関係を Knysh のようにダイナミックには捉えていない。Knysh が個々の神秘家の置かれている状況、地域といったものに重点を置いているのに対して、Baldick はイスラーム外の要素との連関に注目しているからであろう。

④ではガザリーの評価に関して大きく見解が分かれる。現在思われているほどガザリーの後代への影響は少ないと Baldick は主張し、Knysh は *Mystical Islam* への書評でその説には反意を表明している。しかしこの書での Knysh の記述はそれを裏付ける形ではなされていない。例えば Landolt (“Ghazali and ‘Religionswissenschaft’,” *Asiatische Studien* 55 (1991), pp.19-72.) を引用して、アブー＝ハフス・ウマル・スフラワルディーの著作の中にガザリーの影響が見られるとしている (p.202) が、内容から判断するとイブン＝アラビー思想に類似するようにも見え、それほど説得力があるようには見えない。全体として⑤の時期は③に続く第二の統合期と考えられ、何種類かの教科書（アブー＝ハフス・スフラワルディーの *‘Awārif Ma‘ārif* やナジュムッディーン・ラーズィーの *Mirṣād al-‘Ibād* が代表的）が書かれたが、それらがどのような影響を受けて成立したのかはそれほど研究が進んでおらず、今後の課題と言えそうである。それとともにイブン＝アラビーの主著 *Fuṣūṣ al-Ḥikam* の注釈者たちが第二の統合期でどの程度の役割を果たしたのかも重要な問題点だと思われる。

⑥は紙幅もつきてきたので割愛したいが、思想家としても重要な劉智（18世紀前半に没）を擁する中国イスラームへの言及がないことだけは指摘しておきたい。劉智の主著『天方性理』はイスラームの神秘思想と朱熹に遡る宋学が思想的に類似している

ことを指摘し、イブン=アラビーの系統に属するジャーミーやナジュムッディーン・ラーズィーの著作を利用しながら、漢語でイスラーム神秘主義を解説している。概説書においても劉智および中国におけるタサウフが取り上げられるようになることを切に望む。

---

Jean-Pierre Torrell O. P.

*Saint Thomas d'Aquin, maître spirituel, initiation 2*

Cerf, Editions Universitaires de Fribourg, 1996, pp.viii+574

長 倉 久 子

フリブール大学出版会の古代・中世思想シリーズ「VESTIGIA」の第19巻に収められた本書『靈性の師・聖トマス・アクィナス』は、同シリーズ第13巻の同じ著者による前著『聖トマス・アクィナス入門—人物と著作』(*Initiation à saint Thomas d'Aquin, Sa personne et son oeuvre*, 1993, xviii-594 pages) の続編である。トマス神学の講座で定評のあるフリブール大学の神学部で正教授 (professeur ordinaire) のポストにあるドミニコ会士の著者は、前著に続いて本書にも表題の下に「入門」(initiation) という言葉を付しているが、その言葉どおり明瞭な表現と明解な構成で書かれており、〈入門者〉への配慮から、註ではふんだんに論文や研究書を列挙し引用しているが、本文では研究史や細かい議論には深入りせず、トマス自身の言葉を引用することによってトマスの〈靈性〉(spiritualité) を浮き彫りにするよう努めている (p.vii)。また、翻訳書の指摘も—もちろん日本語のものは入っていないが—親切であり、入門者にとって最良の手引きとなっている。

ところで表題から、読者はトマスを「靈性の師」(maître spirituel) と呼ぶことに先ず驚くかも知れない。というのも、我々中世哲学研究者は、トマスを通常、アリストテレスの最良の註解者・言語の鋭い分析者・緻密な思索者であり、哲学史上第一級の哲学者、冷徹な哲学精神に支えられて、カテドラルのように堅固で壮大な—そして、無味乾燥な、としばしば我々は嘆くのであるが—神学体系を築き上げた人と看做しているからである。この偉大な〈哲学者〉の生み出した〈神学〉に圧倒されて、